

「クリエイターの話 ～私のイメージの源泉」

スペースデザイン部会員 おお き あつ こ 大木 敦子

『痕跡と余韻と予感と』

時間と共に移り変わるものが美しいと感じています。石化した木や朽ちていく建物、人工物が自然に飲み込まれていく様。そこには「時間の経過」が必ずあり、物質の経年変化があります。どう頑張っても自分の作品の制作過程はそこに及ばないものです。だからこそ、それを表現したいという興味が次の制作へ自らを駆り立てています。

一人で旅するのが好きです。一人で旅をしていると見知らぬ街なのにそこに住んでいるような、まるでその空間の一部になった感覚に陥り、自分が何者かは大した問題ではないことに気付かされます。

都市部でも郊外でも大自然の中にも時間の流れは等しくあり、人はその空間の一部でしかない。それを確認したくて旅をしている様な気がします。

古い神社の前の長い石段は苔むして光を放っている。

スコットランドの港町では数百年前の街の石畳が夕日を浴びて銀色に輝いている。

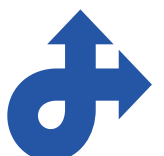
中世の面影を残すイタリアの街では丘の上の崩れかけた城砦に緑の草が生い茂っている。

誰かが作ったものの痕跡や暮らしていた人の跡が残り、見知らぬ誰かがまた通り過ぎていく。

今はもう失われたものの痕跡や余韻、そして次への予感の様なものが制作のイメージに結びついています。

作品制作の根本には自分の内面と向き合うというよりは外側に向かっていく興味関心が大部分を占めています。

織を始めたのは大学に入ってから。絵を勉強したいと思っていましたが、恩師と出会いテキスタイルの持つ奥深さを知りました。やってもやっても次にやりたいことが出てきて、その素材や技法の魅力に取り憑かれ今まで続けています。





重ねた刻 2012年

素材：ウール・ジュート麻 技法：フェルティング

第76回新制作展出品作品

時間の経過と表面の物質感をテーマに制作しました。フェルトは時に自由すぎて苦しむことがあるのですが、フェルトだからこそできる成型の方法や特徴があります。フェルトの表面を「削り取る」という行為自体が腐蝕されゆく物質の変化とリンクしています。



Time Capsule 2013年

素材：ウール、技法：フェルティング

種は永い時間を経ても生命の輝きを内に秘めているものです。朽ちていくもののの中に次の世代への希望がその中に詰まっている、しなやかな生命力と硬質な素材感を表現しました。



光の集め方 2014 年

素材：ウール・シルク 技法：フェルティング

時間で移り変わる陽の光の変化を捉えようと試みた作品。
差し込む光とテラスの手すりの影もまた作品の一部でもあります。



Aging 2020 年

素材：ウール・シルク 技法：織・フェルティング

第 83 回新制作受賞作家展出品作品

木肌がひび割れ剥がれていく、と同時に物質に変化が生じる。風雨に晒されるからこそ作り上げられるもの。瑞々しさは失われても、刻まれたヒビやシワが美しいと感じます。



光の流れるところ 2024 年

素材：ウール 技法：織（コーデュロイ）・フェルティング

第 87 回新制作展出品作品

水や光は形としては捉えられないが必ずそこにあるもの、循環し再び戻ってくる様を織とフェルトを組み合わせて表現しました。

織の技法としてはコーデュロイですが、技法と素材の境界が曖昧になるように仕上げました。



2002 年 東京家政大学 家政学部 服飾美術学科美術専攻（現・造形表現学科）卒業
2010 年 新制作展 初入選
2010 年 テキスタイルアート・ミニアチュール展（以降 8 回出品）
2017 年 個展 ギャラリー・イン・ザ・ブルー
2019 年 新制作展 新作家賞受賞
2021 年 新制作協会 会員推挙

他、グループ展など多数

現在 東京家政大学 家政学部 造形表現学科 講師

その他の情報

テキスタイルアートミニアチュール展 百花百希

京都展：2025 年 5 月 13 日（火）～ 5 月 18 日（日） ギャラリーマロニエ

東京展：2025 年 6 月 6 日（金）～ 6 月 14 日（土） Gallery5610

○SD 通信 Vol. 63『クリエイターの話 ～私のイメージの源泉』大木敦子 編は如何でしたか。

「時間の経過」を題材に織りやフェルティング技法を用いた大木さんの作品。コラムを見ているうちにこれらの作品に直接触れてみたくなりました（触ったら怒られるかもしれませんが笑）。観る者達が積極的に作品に触れ、時間と共にどんどん変化していったら面白いかも、という勝手なイメージが浮かんでしまいました。「時間と共に移り変わるものが美しいと感じています」という冒頭のコトバに共感します。時間をかけて変化した様相は確かに魅力的です。ひび割れや剥がれ、シワといった現象や表情に興味を持ってしまうのは何故なのでしょう。四季の自然の中の微細な変化も見逃さず、カタチや歌（詩）にしてきた DNA はこれからも脈々と続いていくのでしょうか。皆さんの感想は如何ですか。

◆大木敦子さんの情報は新制作協会ホームページにも掲載されています。

→ <https://www.shinseisaku.net/wp/archives/24336>

◆SD 通信 Vol.35「私を創ってくれた 3 つの作品」大木敦子 編はこちらでご覧いただけます。

→ https://www.shinseisaku.net/wp/wp-content/uploads/2023/08/SDcommVol.35_The-three-works.pdf

◆SD 通信のこれまでのバックナンバーは協会ホームページに掲載されています。

→ <https://www.shinseisaku.net/wp/archives/26661>